
べにいろころ

七浦彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
べにいろこころ

【Nコード】
N5141A

【作者名】
七浦彩

【あらすじ】
紅に近い職の女二人のそれぞれの人生

ぶつ、とあかぎれだらけの手に赤い玉が膨れ上がった。

ああ、やってしまった。しずはそつとそれを舐めて、紅花摘みにもう一度集中する。

どうにもトゲが多くて、慣れない。けれどこの辺りは紅花売りで栄えているから、手を抜くことはできない。

しずは化粧の仕方を知らぬ。この紅花は潰して、固めて、口に塗るために使われているのだと聞いた。

しずは、十三になる。まだ、もう、の聲が自分の眠る部屋の戸口で交わされているのを、知っていた。まだ嫁にはいかせんか。家の手伝いをさせねばならぬ。どちらにしても、待っているのはくれなゐの嵐だ。

この紅は。この自分の血を吸って赤く赤く染まった紅は。京の美しい女たちが使うのだという。

しずは汗を拭った。拭っても拭っても、汗は吹き出る。

唇はかさかさとして乾いていた。喉は水を求めていた。

しずは涙を飲み込んだ。この紅を使う女に災いあれと。華やかに女ざかりを過ごすものたちに、泪雨が降るようにと。

はだけた着物がやたらと体に巻きついた。それは自分を抱いた男の残り香のようで、香葉は思わず顔をしかめた。

べつとりと、汗。化粧はどうしたものやら崩れに崩れてしまっている。

香葉は甘い吐息をついた。暗い部屋に、独り。お天道さまを最後に見たのはいつだったかねえ。尋ねて答える者はない。

最後に一緒にお天道さまを見た菊乃は、もう随分と前に逝った。自分より後に来た娘たちも、次々にばたばたと倒れていく。

体を売るのが悪いのか。おかしいな食事が悪いのか。知らないけれども。

香葉は着物の乱れを直して、鏡の掛け布をとった。疲弊し切った顔がそこにある。

かさついた唇に紅をひく。ああ、菊乃も最期はこんな顔をしていたね。次はあたいの番だろう。

紅の入った入れ物を見る。紅は花から作られるそうだと。ずうつとずうつと遠いあの空の向こうで、女たちがその花を摘んでいると。

香葉は唇を噛んだ。天然の紅色が、ぽつり、唇を彩る。紅花摘みの女たちを、うらやんで。長く自由に生きられる身を、呪って。

紅は血の赤。女の血の赤い色なんだよと、誰かがどこかで囁いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5141a/>

べにいろこころ

2010年10月11日00時13分発行